

---

特集 人が大地に刻むもの——地域生態史の試み

---

## 生態論理と地域研究

Eco-logic and Area Studies

古川 久雄\*

FURUKAWA Hisao

---

キーワード：風土、生態論理、東南アジア、地域の限定性、地域の普遍性

KEY WORDS: Fudo, eco-logic, Southeast Asia, confinedness of an area, universality of an area

An area study is a new field of science with its own aim and has its particular way and viewpoint in integrating the facts of areas. It is different from established modern sciences. The modern sciences have pursued to develop the analyzing methods in the partitioned nature and societies. This approach was particularly successful in natural science, which contributes to reveal the hidden faces of the nature, and to transform the “wild nature” to “sweet home” for human beings. But, the excessive burden put on the nature through anthropocentric activities caused the degradation of nature to such a degree that hostile relations between man and nature became apparent in many areas. Furthermore, the economy-centered differentiation of the world into “center” and “periphery” proceeded so intensively that huge economic unbalance has arisen between the “center” and “periphery.” These are the diagnostic to the lost integrity syndrome.

The cause which developed the lost integrity syndrome lies in the principles of the modern civilization. Human beings have lived in the space and time. But, the modern civilization has a strong bias looking in time axis only. In other words, development is preferred, and the symbiosis in the space tends to be neglected.

With this reflection in mind, three points are discussed. First, grasping the integrity of areas is essential for the area study. Second, the Fudo (wind and soil), a concept originated in ancient China, is referred to as a hereditary mould to regulate the man's attitude towards ecological environment. Third, borrowing the term of eco-logic [Tachimoto 1996], maritime Malay world is exemplified as a society where eco-logic regulates the relations among people.

---

\* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科教授 Professor, Kyoto University

## I. 全体と部分

世界にはさまざまな地域がある。風土と言ひ換えてもいい。さまざまな風土がある。風土と地域のニュアンスの違いは後でふれるが、ともかく、土地の形状や、気候、生えている草や木の作り出す植物的景観とそこに棲む獣や鳥、魚、虫の違い、浜、磯、ラグーン、多島海、大海原の中の孤島といった陸に対する海の違い、つまり自然環境の違いがある。そうした自然環境と関連して、耕地や、家、村町の佇まいといった文化景観が違う。さらに目に見える景観には一見現れ難いのだが、作り出す物質的・文化的産物の違いに現れている社会的な違い、これは人間の場合になぞらえると意識や精神の統合の仕方の違い、嗜好、気質の違いといってもよいが、そうした違いがある。自然環境と文化、社会の間に相関関係があると見るか無いと見るか、そこにはいろいろな見方があるが、私はあると見る立場だ。これは後にふれたい。

例をあげてみよう。バンコクからシンガポール迄、マレー半島縦貫列車で南下すると、初めはただっ広いデルタに広大な水田地帯や、縦横に走る水路沿いに疎らな屋敷林をもつ村がある。村には所々独特の屋根飾りをもったお寺がある。半島部にさしかかると、赤土の小さな水田に変わる、水田の広がり小さくなり、村の屋敷林で細かく区切られる。海辺には砂浜が長く伸び、そこには瀟洒なホテルが建ち並び、観光客がウロウロしている。時々、漁港や海上の漁船も見える。ハジャイを過ぎてマレーシアに入ると断然、林がふえ、その中に小さな水田が点在する。林もさまざまで、人手の入っていない林、ドリアンで置き換えられたモコモコとした樹冠の果樹林、整然としたゴム園やオイルパーム園が様々にうつり変わる。家はそれこそドリアン林に埋もれていて、屋敷林からドリアン林、丘の原生林まで微妙に少しずつ移行している場合もある。その様子は人間の側から見ると林にとりついて林を作り替えていった仕事の跡を見せているし、林の側から見ると林という植物共同体が空間占拠の強い意志を見せていると考えてもいい。村にはネギボウズの形をしたモスクの屋根が見え、タイとはまた違った生活信条の実践が窺える。マレーシアのモスクがシリアやエジプトのモスクと似た位置を人々の心の中で占めているのか、あるいは社会統合上の機能の面でも類似点があるのかないかそこは判らない。アニミスティックな信条のレベルで考えると、マレーシアのイスラームはタイの仏教との類似の方が強いかもしれないと思うが、他方ではそのレベルまで沈潜した視点は人の心の構造や宗教の原点に着目する次元になって、タイもマレーシアも西アジアも差異が消えてしまうのは当然とも思う。地域や風土の差異と類似を論ずる場合、認識の次元をどこにおくかで典型的にも地図上でもそのくくり方が違って来るという厄介な問題を抱え込んでいる。とりあえずは、車窓からの眺めを続けよう。ただし先ほどあげた土着的なもの以外に、外来的要素があり、また歴史的過程を考慮する必要は見落とせない。

汽車がクアラルンプールに近づくと車窓に近代的な高層ビルが林立し、高速道路や道路という道路にあふれた車が見える。この様子を見ると風土という言葉は頭に浮かばなくな

り、都会とか、近代化された地域といった言葉が浮かんでくる。しかし、それでもクアラルンプール駅近くに十数年前新しく建てられたプミダヤビルは周囲のサラセン風コロニアル建築とマッチしていて、そのあたりにはバンコクのビル街とは違った景観が生まれている。これを見ると、再び風土性の違いという思いが浮かぶ。

クアラルンプールを出外れると、低い山地に林が濃く、谷には谷地田が多い。丘陵地帯に入るとゴム、オイルパームのプランテーションが広大で、所々に錫鉱や錫をとったあとの白砂の広がった荒地も見られる。やがてジョホール海峡を過ぎてシンガポールに着くと、ここはまたクアラルンプールより一段と凄い大都会である。高層ビルが建ち並び、ビルには世界の大企業、銀行がオフィスを構え、大小の店々はそれぞれ世界中から集まった高級衣類、装飾品、宝石、電気製品、日常雑貨をワンサと並べている。通りには華人、マレー人、インド系住民や様々な外国人が肩を接して足早に歩いている。港を見ると、コンテナ埠頭に横付けの大型貨物船にクレーンで荷下ろしや荷揚げ作業が進み、順番待ちの船がシンガポール海峡に一杯停泊している。実にコスモポリタンな近代都市である。

バンコクからシンガポール迄、車窓から見ただけでも、このように様々な地域の存在に気づく。地域の景観の違いはそれぞれの地域の自然環境の違いとそれにとりつく人間の生活内容の違いに帰着する。人間の生活内容と一口に言ったが、ここには様々な過程と結果が絡んでくる。先ず第一に、どうやって身体を維持し繁殖するかという人間個体の物質的基盤にかかわる様々な生業の形と方法の問題、これは人間個体がまわりの自然と人間社会、つまり広い意味での環境へ働きかける方法の問題である。第二にその相互作用の中で、人間と自然、個人と社会の関係に文化的規範や制度を生み出していく社会的統合の問題である。

自然と文化と社会のこうした相互浸透関係をしっかり見極めて、それらが有機的に連関し、全体性を備えるに至った地域を認めることが、地域認識の根底にある。ひとつの地域が有機的統合性をもった地域と認められるとすれば、その過程は社会文化生態力学であると立本成文は手懸かりになる概念を提出している。生態論理 eco-logic という言葉も作り出している。高谷好一は少し違ったアプローチから「一つの地域は結局はその生態、そこから生まれてくる固有文化や社会、それに外来の文化、そうしたものが織りなす複合体、さらにそれが歴史的に重層、変容して出来ていったもの」と述べている。そのようにして抽出された地域を「世界単位」と呼び、「世界単位とはそこで住民が世界観、価値観を共有するような範囲」と考えている。

自然と文化と社会を統合する有機的連関の存在を想定したところに地域が存立するという見方がここにはある。そして地域の認識には自然、社会、文化を別々に考えるのではなくて、それらを総合的に見る必要があると彼らは主張している。地域研究の存在意義の主張でもある。しかし、地域研究という新しい分野は、従来の学問分野とすりあわせが必ずしもうまくいっていない。疑問が各方面から出る。ひとつは自然を扱う立場の人々からの反論で、次のようなことになろう。人間出現以前から自然は存在しているのだから、自然

の探求に人間社会を含めて考える必要は全くないし、人間に乱された場を研究対象にするのは自然科学としては全く意味がないと。確かに宇宙の構造や星の進化といった問題を扱っている学者がこう言ったとすれば、その通りです、自然認識を進めるためには是非その姿勢で頑張ってくださいと言いたい。しかし、人間に近い自然や半自然、生活に関わる技術を相手にしている分野、たとえば生物学や地質学、農学や工学、医学の人々には地域性や風土性も頭の片隅において下さいとお願いしたい。そこでとらえられる自然像は、地域の地域性や風土性の構造にかかわっているだろうし、人間の技術が自然をどのようにでも支配できると考えられた時代は過ぎ、地域の固有性や住民の意識に留意することが求められる時代になろうとしているのだから。

社会系の分野からの反論は二つの意見にまとめられる。一つは最近発展の著しい都市を重視する立場である。その生活形が伝統的な風土性と切り離された都市という空間に沢山の人が集まり、近代文明を推し進める大きな存在になっていること、そして近代文明の中身はというと先進国が享受している資本主義や国民国家路線の恩恵であることにその人々は注目する。私なら更に物質崇拜と覇権主義の進行もつけ加えるだろう。こうした現実を見るなら、発展途上国の人間が先進国の住民と同じ欲望をもち、それを充足したいと願うのは当然である、その願いを伝統的価値観や風土性の重視で押さえつけようとする方向に地域研究を向けるのは時代錯誤である、こういうことになろうか。しかし、都市を重視する人々は、ジャカルタもバンコクも東京もニューヨークも同じであるから、アセアンの本部をニューヨークに移すことも将来あり得るといった極論すら口にする。一体、こうした議論は本音なのか、建前なのか。地域の全体を見て、敢えて異を唱えることで議論を前向きに進めようとしているのか、都市しか考えていないのか。

地域は、過去・現在に規制される点で時間的存在であることは確かにその通りだが、また、空間的存在でもある。その故に、先に見た車窓風景のように、クアラルンプールやシンガポールは重要な部分だが、森やドリアン林やモスクのある村などとまとまりのある全体を作っていることを認知する必要がある。さもないと地域は無数の部分に分解する。都市だけ見るわけにはいかない。森に例を取ると、それぞれに違う性格のニッチがあり、様々な植物がそのニッチを空間的に棲み分け、巨大な林が成立しているのだが、林の樹種分布は、林の全体と部分に規制された規則性を持っている。そうした森と日常的に接している人々は、個々の茂みに通曉し、同時に森全体の構造で森を特徴づけてもいる。そして森に生きる生活形は、アニミズムの風土性として精神生活にも影響している。海的生活形にも、農耕地の生活形にも類似の状況がある。そして、世界のどこでも同じと言われる町や都市にしても、外の世界の都市と生存をかけてツバ競り合いをしている局面では同様の状況があるのではないかと。時間的・空間的存在である地域は、これまた時間的・空間的存在である様々な小地域からなっている。人間の身体で細胞が骨や筋肉や臓器や神経や脳といった器官を形成し、更に一個の全体性を持った存在を作っていることと類似している。そして生きるためには細胞も人間も、食って増殖せねばならないが、しかし、細胞が細胞

を食い、人間が人間を食うのでは増殖は出来ない。地域の全体性を見ないで、都市の増殖だけを見るのは、共食いを傍観しているのと変わらないように思える。

都市の膨張する外観だけ見ていても全体の地域像は生まれにくい、将来の展望も持ち得ないのではないかと思える。都市論の場合は姿勢が問題になるということだ。都市にはいろいろ困った傾向があるけれども、時代の趨勢だから仕方がないと現実をそのまま受け入れて、設計、修景の手直しなどの面で応援団になるのか、困った傾向の行き過ぎは正す必要があるとみて、その方策を根本的に考えるかのどちらかだと思う。前者はしかし、都市工学の方が向いていよう。後者の場合は都市生活の便利さだけに安住できる筈はなく、やはり都市の便利さと同時に影の部分も見ると、よい譬えではないが、名刀と刀で斬られて露と消えたものの両方を見て、現代という時代の進む方向に焦点を当てざるを得ないだろう。ともかく、東南アジアをシンガポールとバンコクとジャカルタ、ホーチミン、マニラだけで把握は出来ないのだ。

もう一つの批判は次の意見だ。「自然系と人文・社会系の研究者が共同研究できるのは、結局は生態がより利いている『工業化以前の社会』『農村社会』なのではないか。会社社会、工業社会に入った地域・国を対象とする研究では、経済学は自然系との共同研究には不向きである。」これは京都大学東南アジア研究センター外部評価報告書を引用したものだ。この引用文は、地域研究の方法が地域の性格に応じて変わり、工業化以前の社会、工業化社会という違いに対応したあるべき研究体制を論じている部分で、尤もな論議だが、総合的地域研究などというものはありえないと主張している含みもある。今、外部評価自体を問題にするつもりはない。ただ、この短い文章からもうかがえる地域研究像がこちらの抱く像と随分違うことに新鮮な驚きを感じるのである。アタッシュケースから数字のギッシリ詰まった文書を取り出して、官庁の首脳陣を相手に、ミクロ、マクロ経済の数字を経済理論でスッパリと裁って特定産業の強化方法に有力な助言をするといった研究者像がどうしても浮かんでくる。この像は、評者自身も言っているのだが、経済学者のそれで、「地域研究の手法や生態学的アプローチに関わりなく研究が出来る分野」であるという。だからそうした経済学の研究者の補充は中止したらどうかという示唆は首尾一貫している。それはともかく、こちらの受けたもっと大きな驚きは、経済と人の接点にある問題なら、労働市場、労使関係、人事管理、人材育成などの分野という切り方、社会を工業化以前の社会や工業化社会にスパッと分けてしまう切り方である。社会への貢献を強く心がけ、社会の要求を明確に分節したテーマ設定を行うべきだという姿勢が明瞭で、成る程と感心する。社会の活発な活動局面への強い関心が示されている。しかし同時に、歯車の一部にキッチリ納まりすぎていることに危惧の念も生まれる。経済活動は人間生活の中軸的位置を占めるのだから、地域の価値観、宗教、物質的生活伝統の幅広い分野から、経済活動と地域研究の接点にあるもう少しゆったりしたテーマがいくらかあるだろうと思うのだが。そうすると、必然的に自然や文化、社会の性格を総合的に考えざるを得ない。尤もこのアプローチは近代化を支援する側面から、そして経済研究の現在の主流からは離れることにな

るので、その決断は当事者にゆだねざるを得ない。

蛇足を一つつけ加えると、地域空間から遊離し、空間を考慮の外においた工場や会社はペーパーカンパニーかバブル的存在でしかあり得ない。会社社会、工場社会といっても、会社や工場だけの地域も国もない。工業化以前の社会と工業化社会では社会資本の量が断然違うことの強調だろうけれども、それ以外の点でも飛躍的な差があるのだろうか。工業化以前の社会も組織の階層は多数あり、それらを統合する自律的な秩序はピグミーでも精密複雑に発達している。社会の基本単位である家族でも自律的秩序の精緻さは本質的に工場や会社以上だ。家族の秩序原理を国家の秩序原理にまで貫通させている例に中国がある。華僑の活躍というものは家族の秩序原理をほとんど唯一の組織原理とし、血縁地縁ネットワークと資本で補強したものだだろう。こう見ると社会資本の量はそれだけでは社会を区別する基準とはならず、むしろ社会の組織原理、それは何に大きな価値をおくか文化の志向性の問題だが、その方がはるかに重要だと思える。地域の捉え方が私共と違うのだろうか。私共は産業化社会といっても GNP や GDP が全てではないと思っている。もし先進国が GDPこそ唯一の価値評価基準だと宣言するのなら、その他の45億以上の人々の生活は何だということになる。

要するに、地域の現象は時間的・空間的に錯綜して、全て互いに関連しあっている。個別地域の境界をこえて他地域に迄その関係が広がっている。個々の現象をこれは自然の、これは文化の、社会の現象と振り分けてしまうと、地域研究は成立しない。従来専門分野だけで間に合う。しかし従来専門分野だけでは個別地域の全体像も得られないから、地域研究が要請されているのだろう。新しい分野である地域研究は個別の現象を見ながら全体像を把握するのだという意図でよいのではないか。個別と全体の関係をとらえる視点は様々なスペクトラムを見せることになるだろう。地球全体社会と個別地域という高谷好一の視点、東南アジアの全体像と個別地域という視点、地域研究の全体像は何かという立本成文の視点、アジアとヨーロッパ、アジアと日本といった視点、あるいは個別分野で切った全世界像もあり得る。要は立本成文のいう社会文化生態力学アプローチを心がけることだろう。個別を全体につなげていく筋道が社会文化生態力学アプローチでマニュアルとして確立していないとしても、それはかまわないのではないか。人間に例を取ると、統合性をもった一個の人間と、部分としての細胞組織の間の連関構造は未解明だが、人間が独立した存在として様々な働きをきちんと行えるように、地域も様々な部分を統合した有機的生命体、その間の筋道は未知としても、であることを認めざるを得ない。全体性の規制を受けた部分、部分の統合体としての全体、その関係を意識しながら、独立個体としての地域を認識し、望むらくは全地球的総合につなげる姿勢が重要ということだろう。

## II. 風土と地域

ここまで風土と地域という二つの言葉をはっきり区別しないまま使ってきた。整理してみたい。風土は元々古代中国の用語だ。土は生命を育み、生命の気を放出する。風は土の

その働きを助長し、気を空間のある範囲にまで広げる。中国思想のことだから、人間は当然そこに含まれている。風土は人間から独立した自然ではなく、自然と人間を包み込んだ全体的な空間単位である。そして景色、土地柄、人の気質、こうしたものを包む郷土である。更に古代日本の『風土記』では、国引き神話つまり歴史的意識があり、駅、軍屯、郡衛、ため池など造営物も含まれる。大変幅広い意味内容がある。地域研究では殊に重視すべき概念だ。海田能宏はすでに早く風土の工学という概念に取り込んでいる。

分析的に演繹すると、風土は非生物的、生物的生命が物質流とエネルギー流で連関されている場であり、部分が特有の構造と機能に統合されている生命体だろう。この定義は世界各地を歩いて感じた直感を分析的に表現したものだ。非生物的生命を想定するのは無理に擬人化する意図ではなく、たとえば水、蒸気、雲、雨といった無機的現象の循環性と人間を越えた超越性に非生物的生命の意志を認めざるを得ないからだ。生物的生命の出現や生物の進化に働いた超越的意志と同質の存在を見ないわけにはいかない。

人間出現以前にも植物や動物にとっての風土があったに違いないし、今もそうだろう。人間出現以降は人間の風土意識も生じた。生物の風土意識の内容は植物、動物、人間それぞれの生命のあり方が違うように当然違うだろう。しかし共通性もあろう。生物は環境を身体に取り込むことではじめて生物として存続・増殖でき、環境は生物を生物たらしめることで風土に転化する。環境と風土という言葉は、生物と環境が関係を志向する場に視点を置くか、その外に置くかの違いである。説明上、視点を分けている。換言すると、風土の場で環境を離れた生物の物質的・機能的な生活はあり得ないし、生物の物質的・機能的な生活を離れた環境もあり得ない。

生物を内包した環境は生態環境と言ってもいい。人間にしろ、他の生物にしろ、成長と増殖、営業のために生態環境を取り込んでいく過程は、同時に自己を含めた生態環境の関係性を学ぶ過程でもある。視覚的に説明すると、環境の主体性と生物個体の主体性が交わり、二つの意図が撚り合わされて一本の螺旋が伸びていくのである。DNAの二重螺旋のイメージがある。尤も生態環境の巨大さからすると、螺旋といっても巨大な大木の幹に巻き付いて登る細い蜘蛛の糸のイメージがより適切だろう。螺旋のある時点の相に注目すると、物質とエネルギー流連関の場としての風土の姿が顕れ、動的な相に注目すると通時的な形質としての風土性が顕れると説明上考えてもよい。

風土を作る生物の生活内容は、生物個体の遺伝形質が大きく作用する。しかし生物も個体の形態から社会の形態に目を移すと、社会を維持するための様々な仕組みがある。動物ではたとえば蟻のように、女王蟻、兵隊蟻、働き蟻といった分業の仕組みや、魚が縄張りを作って共倒れを防ぐといった仕組みが顕著である。植物でも群落を作り、整然たる階層構造を示すとか、群落の中の樹木は孤立状態の場合と全く違った樹冠形をとる、つまりある生物群が他の生物群と相互作用を行いつつ環境へ適応していく過程で個体の形や社会の形を制御する。これをどう考えるのか。環境に適応して生活形を変えることが遺伝情報に書き込まれているか、生命体たる風土の統合力があたかも個体と社会の形を規制する鋳型

として働くか、これは両方を考えざるを得ない。この際、風土の統合力は個体の遺伝情報より統合力が弱くなることは避けられない。風土の変化の機会是个体の遺伝系統よりも多い。風土の鑄型自体変化する。結果的に前の風土は後の風土に引き渡され、後の風土はそれを変化した鑄型にいれ、鑄直した風土を更に引き渡すという風に螺旋運動が続く。

人間は他の生物に比べて意識の統合作用が格段に発達しており、個人と社会の維持・増殖が組織、規範、社会的分業の創出でどんどん進められることを見出し、文明を作り出した。そこに生まれる風土の生活内容は、環境規制が強い生物社会よりも文明規制が強くなり、文明をもどんどん変化させる。その点で他の生物と違う。しかし、生物においてすら身体を再生する遺伝情報と風土の鑄型が共働し、個体の形態のみならず、環境適応を果たすために、社会の形態をも規制するところに、人間社会においても物質的に有限な身体を離れられない文明を風土の鑄型が規制する共通基盤がある。その共通性をもっと端的に言う、人間も生物も生命を存続するためには生態環境と文明の統合をはかることが必須の条件ということだ。風土という統合の地平から同じことを見返ると、その関係はもっとはっきりする。生物も人間も環境の中で孤立状態では生きられず社会を作る。そして様々な仕組みで社会と個体の関係密度を高める。つまり文明を作る。だから文明は生物の環境への物質的生命的適応の仕組みということになる。人間は意識による統合作用が強いだけに、環境適応過程の文明化をどんどん進める。その仕組みの一部分だけ注目すると環境から切り離されたかの如き形がある。しかし、部分を統合する生命体全体からすると、それは環境へ適応する生命体の一部分なのである。要するに文明の内容に生命から離れ、環境から離れた部分などあり得ないのだ。別の表現をすると、環境と文明の関係は乖離であり漸近であり、人間社会が生きることにおいてふたつはひとつに統合されるのだ。その統合作用の働きで、風土の螺旋は伸び、新たな風土へ変化し続ける。

風土は変化する。しかし相対的位置からその変化を見ると話はまた違う。人間と環境が関係を志向する場に居る人間、つまりある風土に居る人間にとっては変化である。しかしその場の外に居る人間が見た場合、統合力による慣性運動が続いている状態を見るだけだ。外の観察者はその慣性運動、つまり風土性を見ることになる。最初の例にあげたことだが、ブミダヤビルの一角を見た時ビルは巨大になったけれども、その外観上の変化にも拘わらず、風土性を感じたのは、まさに私が相対的位置から見ていたからだ。

さて、これまで述べた風土はある空間の中での生態環境と文化・民族に分節された人間の統合体であり、そこに生まれる風土性は閉じた空間での内発的固有的性格であるという文脈から離れない。従来風土という言葉の使い方にある風土病とか風土記という表現はまさにそのことを前提としたものである。しかしこの前提は都合が悪い。普遍的な生命と物質の構造を認めた上で、それにも拘わらず独自の空間が生ずるところに空間の生命体としての統合を見る立場からは都合が悪い。始点において独自性・固有性をふりあてたのでは、神の見えざる手という安易な論に走らざるを得ない。岩や雲にも無生物的生命があり、桜、梅、虫や魚にもそれぞれの意識があり、人間の生命もそれらと生命的物質的基盤を共通に



すると観た上で、その統合が風土の独自性、固有性を生み出すということではなければ、統合体としての風土の生命が生まれない。環境や文化や民族の独自性に風土が瓦解してしまう。風土に生命を吹き込むのは人間、特定の民族といったことになりかねない。

普遍的な生命と物質の構造と機能を認め、その統合に空間の独自性を求める立場からは、どこの水も、どこの人も同じでなければならない。こっちの水は甘いぞ、あっちの水は苦いぞ、こっちの人はあっちの人より優れているであってはならない。こっちの水が甘くなり、あっちの水が苦くなるのは、水とその環境の生命的物質の相互作用の結果に他ならない。こっちの人もあっちの人も人間としての生命の構造と機能は同じであることに変わりはない。そのような差をはじめからつけるようなケチな偏った選択を自然は行わない。

不都合はまだある。地表のどこの空間も孤立して在ることはない。南極大陸すら中生代の大陸移動以前はパンゲアに合体していたといった地質学的発見を待つ迄もなく、海が全ての陸地をつないでいる。逆に見ると陸が全ての海をつないでいる。生命出現以来、どの空間も生命がふれていないところはない。活発に動きまわる人間という動物の出現以降は、地表の全ての空間を人間が歩いていると考える証拠は充分ある。人間は自己の生命の維持と増殖に迫られて、全ての空間を手で触れ、働きかけ、評価してきた。手つかずの自然は深海底ぐらいで、陸地にはない。熱帯の暗い森も、乾燥帯の砂漠も人手は入っている。森や砂漠があるのは森や砂漠としておいておくのが一番よいという判断の結果に他ならない。草原やサバンナ、照葉樹林にいたっては人間と自然の共働作品と考えた方がよい。

有史以降になると、人間の移動を記す史書はゴマンとあり、それらの教えることは、移動し、混淆することが人間の常態であるということだ。移動する人間は移動前に生活していた空間の文明を他の空間に運び込む。だからどの空間の文明であれ、閉鎖空間で孤立的に、その空間の生態環境のみと同調的に、つまりその空間で内発的に形成されるということとはあり得ない。ある空間の文明的特性の基底にあるこの混淆性を考えると、風土概念が始点におく空間の限定性、その内発的固有性という枠組みは誠に不都合である。オラが村の自慢話になりかねない。そしてオラが村の優れた文明の優越性はそれを育てた風土の優越性に由来する、地表の全てにその風土を輸出すべしということになりかねない。ヨーロッパの大航海時代以降現在までの歴史は、この考えが実践されたことを示す。

こう考えると、風土に代わる言葉を見つけねばならない。世界全体が連関し合った混淆の場であることを認めた上で、普遍的な生命の構造と機能が連関するが故に、空間それぞれに独自の・固有的性格が生まれるのだという考えを表現する言葉が要る。

風土という言葉をさし当たり置き換えているのは地域である。我々の営為は地域研究という看板で行っていることもあり、地域という言葉の長所・短所は意識しておいた方がよい。長所も短所も、風土のように文化的文脈での特別な意味が定まっていないところにある。どんな文脈にも使える。あたかも自由反応基のようにどんな言葉にもくっつけられる。インドネシアの地域、森林の地域、都市の地域などである。その結果作られる言葉は、全方位で無性格、中立的なものになることは、たとえばそれを風土で置き換えるとよく判る。

インドネシアの風土、森林の風土、都市の風土となると、話し手の主体的姿勢が限定され、目に見える。更に地域性、風土性の差し替えをやってみると、違いはもっとはつきりする。

地域という言葉の全方位的無性格さ、中立的性格が研究分野を限定しないこと、これは長所である。どんな研究分野も参加できる。唯一の限定は地域的限定である。但し、日本語の地域という言葉についてまわる狭さは、短所である。域という字は日本語でも漢語でも、さかい、くぎりだが、地はニュアンスが違う。漢語では地はのびのびひろがる大地を形声する字の意味が生きているので、地域は区画された土地を指すと同時に、大地の広がりの中にそれを見る、地と文の両方を見るというニュアンスがある。漢字を輸入した日本ではそんなニュアンスは消えてしまって、あくまで区画された土地である。だから地域研究は特定地域を先ず決めて、地域割りの枠で縛る。たとえば東南アジア研究となる。その枠の外の地域を扱うのはいけない、しかし地域内なら何を扱ってもよい。こういうところにも地域という言葉の無性格さがよく出ている。しかし、こういうことでは地域研究は既存諸分野の売場に過ぎなくなってしまうだろう。少なくとも漢語のもつ地域の意味程度の高い視点を賦与する必要がある。そして望むらくは、世界大の人間活動と連結しながらも、風土的独自性を作ってきた統合的生命体という文脈の意味を与える必要がある。そこでは生態も歴史も文化・経済・政治といった文明も全てが絡み合っている。その生命体の構造と機能を明らかにすること、そして地球全体社会の生命の維持と発展に貢献することが地域研究の目標とならねばならない。

ここでいう地域概念は文化相対主義的な文脈で認知される独自地域とは違う。似て非なるものであることに注意したい。文化相対主義は相対性理論と、文明の普遍性を振り回してきたヨーロッパの懺悔の悪しき合体に他ならない。文化相対主義を埋め込んだ教科書を流布させることが、受け取る側の責任もあるけれども、悪しき普遍主義になっている。この悪しき構図は発信側と受信側の関係性において発生するので、一方的に発信側を非難するのは酷かもしれない。受信側は発信側の経緯をあらかこうかと詮索することにつつをぬかすという文化的去勢性を露呈するのではなく、虚心坦懐に地域に身を置き、その声を聞き、その声を世界に発信するということであらねばならない。そうするに足る内容を風土的な地域は持っていると思うのである。

### III. 東南アジアの生態論理

東南アジアと呼ばれる地域の生態環境上の特徴を世界大で考えると、熱帯の多島海とそこにある暗い森である。海と森が相接して在るので、森棲みの生活と海棲みの生活は相互に強く依存し合っている。一人のライフヒストリーの中で森棲みと海棲みの両面が展開することもありふれている。そうした生活内容がこの地域の風土性を作る原像と私共は観ている。そこには多島海と熱帯林の豊かな資源を求めて多くの異人も入り込んできた。その異人に対して、人々は寛容である。社会全体の性格にも、異なる文化、制度、宗教に対する寛容さがある。この寛容さに接した普遍主義的学者達は、緩やかな構造をもった社会と

とらえたり、この地域の村は偶然的な家屋の集合だと言ったりする。しかし私はこうした見方は間違っていると思っている。緩やかな構造という時、対極に想定されているのは、強い王権やそれを引き継いだ国家の権力と制度に強く規制された社会だろう。あるいはそうした人工制度で境界や家屋の配置を縛られた村だろう。内在的と見える地縁関係にも実は人工的外部規制が入れ子構造で貫徹している社会、それだけが社会の在り方だと思っている人々には、熱帯多雨林多島海社会が緩やかな構造、偶然の産物と見えるのだろう。普遍主義論者は気付きようもないが、この地域の社会の構造も、村を作る家屋の集合も、実は全く別の論理に従ったきわめて緊密且つ必然的なものである。それは人間が環境を身体に取り込んで生命を維持増殖するうえに避けられない基底論理であり、それは生態論理と呼べよう。生きて働く、働いて生きる生活で自分が食わねばならないように、他人も食わねばならないことを前提とした社会関係に姿を顕す自然の摂理、それが生態論理である。更に人が生きるには他の生物も生きてもらわないと困る。だから生物の生命的物質的基盤は自らの基盤でもある。生物と人間を生命的物質的性格の同質性において同等視すること、これも生態論理である。生態論理は熱帯多雨林多島海の風土の鑄型となり、生活形だけでなく、人々の心性、文化の形、社会の仕組みを規制する。

ところで、自然の摂理と生態論理は同じなのか違うのか。私の受けとめ方はこうだ。自然の摂理は生物的生命が登場する以前の世界も以後の世界も、そして生物的生命の誕生そのものにも働いている。地球上のみならず、これは大は無限の宇宙から小は素粒子の空間まで全ての空間、そして無限の過去から未来永劫までの全ての時間に存在する自然の原理だ。地球上の生物的生命の窺い知り得ないものだ。生物的生命はその身体に自然の摂理を宿しており、自然の摂理は生物の身体に凝縮しているが、凝縮しているといってもその関係は全体と部分なのか、全体と全体の縮小版なのか、これは永遠の謎だろう。

はっきりしていることはある。人間も生物も生態環境を身体に取り込む過程で、自己を含めた生態環境の構成員相互間の関係性を認識していることだ。関係でなく関係性としたのは単一の関係でなく、関係全体を認識していると思えるからだ。認識といっても植物や動物、人間それぞれに認識の方法も形も違う。関係といっても人間が物理化学的方法や数学的論理で証明できるきわめて僅かな関係から、証明できないものまで広い範囲にわたる。元来、生物は論証して生きているわけではないから、論証できない関係がいくらあろうと驚くことはない。生態学は本来この関係性の認識を目指してスタートしたものだが、現在の生態学の記述する関係は上記関係性のごく僅かな一部を占めるのみである。この限定性を踏まえると、生態学と生態という言葉の間には大きな間隙がある。

生活する人間が生態環境の中で遭遇する関係性は、論証できるもの、論証はなくとも経験的な真実、類推可能なもの、そして類推も及ばない自然の摂理まで、様々だろう。しかし生態環境だけ見て、その法則性を見つけようと遮二無二なっていると、関係性は単に生態学的法則性にとどまるし、自然の摂理を感ずることもない。ところが生態環境から目を生活形に移して、たとえば移住を動機づける価値観や移住社会での契約関係を見、そこ

に生態環境の中での関係を見出した時、生態から人間の生活形、価値観、社会的関係まで貫いている関係性に気がつく。その気になって他の局面を見ると、そこにも生態から社会まで貫いている関係性がある。こうなると、これは生態論理の社会だと結論づけざるをえない。そして、それ迄無秩序で偶然的で、バラバラに見えた生活形が、緊密で必然的なものであることに気がつくのである。

東南アジアが今もなお生態論理の社会であるのは、この地域の多島海と熱帯多雨林が強いエネルギーを放つ広大な空間であることに由来する。強いエネルギーの性格は二面性がある。人間を拒否する側面と人間を抱きとめる側面だ。多島海にしる熱帯多雨林にしる、難破やマラリアや瘴気で命をおとす危険がいつもある。他方、そこは生活資材だけでなく、華人やアラブ人の求める贅沢な海産物、ナマコ、真珠、タイマイ、燕の巣や香木香料の沈香、白檀、チョウジ、ナツメグ、コショウその他、豊かな熱帯産物の宝庫でもある。住民はこうした産物採取に危険を賭した暮らしの中で、自然と真正面に向き合い、日々直接的に作用し、反応を受けとめる。つまり生態環境の論理を日々学び、強大なエネルギーの場に抱きとめられる。しかし、危険の一杯ある環境なので、定着的・蓄積的生活型は生まれない。瘴癘の森には住めないで、海と森の狭間に移動的居住場をおき、海や森の産物を求めて移動する。森を全面的に伐開して農地に変えるようなことは生態にも生活内容にも適合していない。そこに生まれる生活型を私は通過型と呼んでいる。巨大な元金は手を付けず利子で暮らす、生物の生活型になぞらえると海や森の生産物に寄生すると言える。寄生生物がきわめて複雑な凹凸をもつ微小なニッチェに分散的に存在するように、この生活型は先述した如き国際商品以外に様々なニッチェと産物を求め、移動的・分散的になる。従って平原や草原のように巨大な集落や都市、強大な権力集中は生まれない。そのかわり、寄生的通過型生活は、必然的に生態環境の保全に長じている。生態の法則性を順守して、生態保存に生み出された有形無形の規範は社会組織を律する強力な鑄型である。スマトラやカリマンタンに広大な森が1950年代迄保全されてきた理由はここにある。

勿論、この地域にも様々な異人、異文明は流入している。珍奇な物産を求めて先ず商人が港に集まる。ジャワ、バリといった肥沃なるスング火山弧、乾燥林の東北タイ、上ビルマには定着的農耕民や乾燥帯に発した文明が入ってきた。そこには生態と異質な石造大伽藍や都市文明、帝王観念やヒンドゥー、仏教、島嶼部には更にイスラームといったものが移植された。こうした新しい要素は好んで吸収されたが、吸収され咀嚼される過程で多くの要素が次第に変形・変質していったことも明白な事実だ。大伽藍や都市は熱帯林に覆われ、帝王観念はシャーマニックな神王観念に変貌し、ヒンドゥー教、仏教、更にイスラームもアニミスティックな心性に受け入れられるように変質ないしはそれを包む外套となった。生態論理の風土的鑄型が働いている次第だ。

現代という時代は強大な力をもった近代文明が東南アジアに大規模に侵入している。近代文明は西ヨーロッパという異なった風土性をもつ社会の産物だ。西ヨーロッパもかつて森に覆われ、人々が石槍をもって獣を追い回していた頃、更に後にオリエントから麦農耕

を受け入れた頃までは生態論理の世界だったと想定している。しかし麦農耕が広がり、金属器使用を受け入れて森が消えた頃には、生態論理から異なる風土性へ移り変わる。後に人間中心的合理主義や機械主義で自然と人間を統合することになる風土性が次第に強まったと想定している。そうするとオリентはどう考えるのか。西ヨーロッパへ麦農耕や金属器使用を伝えた当のオリентは全く違う動きを示したと私は考えている。厳しい乾燥気候の中で完全人工空間に農耕を確立し、城壁都市を作り、古代世界の中心となったオリентは、厳しい環境のために生態論理を保持し、それを厳格な神学論理に結晶化させた。生物的要素の極端に少ない環境では、身体の中の生物的要素と、完全人工空間から仰ぎ見る澄んだ星空が一切の不純物を取り払われた状態で神学論理に結晶化するのだ。

西ヨーロッパが人間中心的合理主義へ動いた風土的背景は落葉広葉樹林という穏和な林が大きな要因だ。これは熱帯多雨林と違って、人間を拒否する側面も、人間を抱きとめる側面も、どちらもエネルギーが小さい。人間の意志に従順な林である。歴史を動かすような産物もない代わりに、人間を襲うこともない。伐り開けば容易に人間の生活空間になる。そこにあるポドゾル性の土と石灰質の土もその点で同質である。熱帯の火山性土のような肥沃さはないが、毒もない。人間と家畜の廃棄物を添加し続けると、次第に肥沃度が増す。西ヨーロッパの落葉広葉樹林とその穏和な土は人間中心的合理主義を受け入れ培養する素地である。

もう一つの機械主義、これは圧倒的に高いオリент文明、更にその後身の地中海文明と接触して、さんざんにやつつけられた経緯から生まれてきたものだろう。これらの前走者は生活空間形成に魅力的なデザインと卓抜した工法を誇る。たとえばフェニキアやギリシャ、ローマの都市と辺境のガリアやゲルマンの生活空間を比べるとその文明の差は巨大であった。ローマ型都市は中心のフォルムにバシリカ、議事堂、神殿、凱旋門、軍隊行進道路、市場を置き、更に多数の大浴場、劇場、競技場があちこちに置かれ、都市生活を支えるための大水道橋と道路が集中する。しかもこれらが全て石造建造物で、現在に至るまで世界中から集まる観光客に人間中心的合理主義の古代世界における到達点を誇示している。ローマ帝国はこうした都市を当時の辺境だったパリやロンドンにも作り、金髪の野獣達に人間中心的合理主義を具体的な形で教えた。形の華麗さに目をくらまされた後走者は、前走者の文明の根にある生態論理としての神学論理を次第に消去し、人間中心的合理主義を推し進めて、機械主義的自然観を発展させたのである。地中海から浸透してきた異文明を材料にして西ヨーロッパの風土の鋳型が働いた結果が近代文明である。

近代文明は様々な物の形をもって全世界へ押し寄せている。丁度地中海文明が華麗な都市の形をもって西ヨーロッパに浸透したと同じ現象がある。特に都市はこの異文明が浸透する橋頭堡である。クアラルンプールもジャカルタも東京もパリもビルが増え、車が走りまわり、テレビが同じニュースを流す。更に資本主義社会という共通の社会関係を浸透させる。世界中が均一の情報化社会になることを目指しているかの如き世論誘導がある。しかし世界が一つの均一な存在になることは決してない。自然と人間の長い歴史を経て様々

な地域や風土が存続すること自体がその反証だ。強大な整流作用が在るにしても、それぞれの地域が生態環境と相互作用を行う経過で生まれた遺伝形質が、地域によって違う。自然のあり方、生業のあり方、家族のあり方、言葉、伝統、慣習法といったものに埋め込まれた無数の遺伝形質が違う。個々の人間が違うように、個々の風土の違いもあり続ける。

多様で不幸な戦争がなく、貧に苦しみ、富におぼれることのない世界を目指すとしても、それは人間中心的合理主義機械主義の近代文明ではよくなし得ない。それは、生命の構造と機能の同質性を認めて尚且つ違った風土が生じるところに自然の摂理を見る構造になっていない。岩や雲にも無生物的生命を認め、桜や虫や魚にそれぞれの意識を認め、人間の生命もそれらと生命的物質の共通性を認めるという構造になっていない。こっちの水は甘いぞ、あっちの水は苦いぞ、こっちの民族はあっちの民族より優れているという意識を持ち続けて世界の統合をうたうことは覇権主義そのものだ。地域研究には異なる地域・風土の声を聞き、その比較の上に固有な地域の共存を求める姿勢が要る。

先に、風土の変化を観る相対的位置の効果にふれたが、地域間の比較においても同質の現象がある。ひとつの社会、たとえば東南アジアの熱帯多雨林多島海に居る人々自身は、社会に埋め込まれた生態論理に気付くことはない。その人々にとっては、当たり前すぎるからだ。そこに地域研究の存在理由がある。生態論理を忘れてしまったが為に無用な苦しみを抱え、崩壊に瀕した社会も地球には一杯ある。そこへ生態論理を発信するのが東南アジアの地域研究者の役目ではなかろうか。

ここでまた全体と部分の関係に戻るのだが、相対的位置の問題は地域研究の内部自体にもある。生態環境なり生活形なり、政治や経済、そういった個々の部分のみに視線をとどめたのでは、それらを統合する全体が見えない。それらをつなぐ論理に気がつかない。地域の声を聞くにはたとえ素朴なアプローチでもいいから、全体を観る姿勢、地域の声を聞く姿勢がいる。それが既存分野の寄せ集めと違う地域研究を作る基礎であり、その姿勢を発展させることがとりもなおさず、地域研究の発展につながるのだろう。

物とエネルギーの普遍的性格、しかしその普遍性を個別の形で顕す自然の摂理に気付いて初めて地域研究は個別地域主義の呪縛から自由になりえ、また作られたグローバリズムの虚構から自由になりうると思うがどうだろうか。

## 参考文献

今西錦司

1941 『生物の世界』 弘文堂 (1972 講談社文庫)

立本成文

1996 『地域研究の問題と方法——社会文化生態力学の試み』 京都大学学術出版会

高谷好一

1996 『世界単位から世界を見る、地域研究の視座』 京都大学学術出版会

1997 『多文明世界の構図——超近代の基本的論理を考える』 中公新書